平成19年度　学校自己評価表（最終評価）

中長期目標（学校ビジョン）	「倉吉東高のかたち」の理想に沿って、本校の教育活動を更に充実発展させるとともに、主体的な学習者・21世紀の日本を支え、世界をリードする高い志を持った人材の育成をめざす。

今年度の重点目標	1 「倉吉東高のかたち」の充実・発展 ・学校文化度の向上　・教育力向上の推進　・進路指導の充実 2 学校評価の充実 3 中高連携の強化 4 専攻科教育の一層の充実 5 定時制教育の更なる充実発展 6 創立100周年の準備

年度当初					評価結果（ 3 ）月		
評価項目	具体的項目	目指す姿	現状	具体的方策	経過・達成状況	評価	次年度の改善方策
1「倉吉東高のかたち」の充実・発展 学校文化度の向上	規律ある生活	・全校遅刻0を目指す ・指導7項目の遵守 ・安易な欠席、早退をなくす。 ・自分の置かれた立場や場面に相応しい言動ができる。 ・校内に品位と落ち着いた雰囲気が感じられる。	・全校遅刻0の日、昨年度3日。 ・一部頭髪加工や服装の着こなしに問題のある生徒が見受けられる。 ・月曜日や行事、部活動の大会の翌日に欠席や早退が多い。	・育友会（健全育成委員会活動）を通して保護者への理解と協力を求める。 ・全校集会学年集会などでねばり強く指導する。 ・挨拶の励行、教師や外来者へのマナー指導を行う。 ・様々な学校行事生徒会行事の場面で場にふさわしい言動ができるよう必要に応じた支援を行う。	・全校遅刻0の日数：3日　（昨年3日） ・教員による定期的な生徒昇降口付近での登校指導や、多遅刻者に反省を促す積極的な指導により、欠席・遅刻・早退数は学年単位での統計値でまずまず改善したが、全校遅刻0の日は増加しなかった。 ・月曜日の欠席が依然として多い。 ・品位ある服装や場に応じた言動が出来るという点では、十分に達成されたとは言い難い。	B	・全体としては、欠席・遅刻とも減少しているので、来年度も指導を継続していく。 ・学校文化度の向上については年度末反省でビジョン委員会が提案した方策を粛々と実行していく。
	チューター制度の充実	・新入生が高校生活へスムーズに移行している。 ・チューター実践を通して、上級生がリーダーとしての自覚を深めている。 ・縦の人間関係の強化と次世代への継承がなされている。	・導入3年目を迎え、ある程度の完成度が要求される。 ・新入生の本校生としての自覚（服装や家庭学習時間など）が早期に定着していない。 ・上級生としての自覚も十分でない。	・チューターハンドブックを効果的に活用する。 ・チューターオリエンテーションを充実させる。 ・チューター制度への職員の関わりを強化する。	・ハンドブックを利用しながらのチュータリングは新入生には概ね好評で、よい情報交換の場となっており、全体的にスムーズに高校生活に移行できたと思われる。新入生・上級生・保護者ともアンケートの肯定率は昨年より向上した。 ・チューターの活動状況は概ね期待されたものであったが、望ましい姿を示せないチューターも少数あった。 ・ハンドブックも優れた内容の冊子であり、より一層の効果的活用法を考えたい。 ・チューターオリエンテーションの企画と内容は、教員側の熱心な取り組み姿勢により、優れたものになったが、一方で関わる教員に偏りが生じた。	A	・中学生から高校生へのスムーズな移行の重要性は年々高まっている。職員の一層の意思疎通を図っていく。 ・チューター側の意識変化を促す必要がある。上級生としての自覚を育成するプログラム開発をめざす。
	朝読書の定着と読書小論文活動の充実	・抽象的思考力がある。 ・学びを自らの生き方に昇華できる。 ・各教科を学ぶ前提となる基礎学力が身に付いている。 ・精神的に成長している。 ・社会的存在であることを自覚している。	・生徒1人あたりの図書館利用率が低い。 ・全ての教科の基礎となる読書量が足りない。 ・精神的に幼さを感じる生徒が見られる。	・今年度から開始した朝読書を企画に沿って着実に実行していく。 ・各生徒の読書状況を把握して必読図書はもとより、一定の抽象度を有する本を多く読む習慣を育成する。 ・LHRなどで「学びの復権」冊子を十分活用する。	・朝読書活動は確実に定着しており、図書館の貸出冊数は飛躍的に増加した（前年度約5400冊・今年度約8000冊）。しかし、担任による読書カードの点検は不十分であった。 ・本年度2回の小論文活動を実施、優秀作品を選考し、作品集を作成したが、完成度は物足りない。 ・今年度版「学びの復権」冊子を刊行・活用して、LHRを実施、生徒が自らの「学び」について振り返るよい機会となった。	B	・読書カードの改善を行う。また朝読書の意義を生徒教員共に再確認する。 ・「学びの復権」冊子の活用を更に進めるために、一定の時期に朝読書の時間を使って、集中的に読む機会を確保する。
	テーマ学習の深化	・科学的根拠にもとづいた論理的かつ説得力あるプレゼンテーションができる。 ・学園祭のプレゼンテーションコンテスト・国際高校生フォーラムに発展させることが出来る。	・インターネットなどでの調査研究がほとんどで考察による深まりが不足している。 ・教員の関わりが不十分である。	・本というメディアが論理を構成する上でかけがえのないものであり、本を読んで研究するといった姿勢の必要性を理解させる。 ・考察の深まりを促す教師側からの指導を強化する。 ・朝読書との連携をはかる。	・夏休み前に企画を立て、夏休み以降取り組んできた。テーマにユニークなものがある反面、研究に深まりのないものも見られる。時間をかけて準備した班とそうでない班がある。	B	・活動の意義をもう一度徹底する機会を設ける。 ・テーマ設定段階で指導する教員がチェックを行う。また、適宜継続的な指導をしていく必要がある。
教育力向上の推進	教科指導力の向上	・教員1人ひとりが高い教科指導力を持ち、授業を通して各教科の魅力や奥深さを生徒に伝えることができる。 ・テストや大学受験といった実利目的を越えて、生徒の学びが真理探究といった高次のものとなっている。	・教員の教科指導力に未熟な部分があり、生徒の学習を内発的主体的なものにまで高められていない。　・生徒の学習が依然としてテストや課題に追われたその場しのぎ的学習であることが多い。	・教科の枠を越えた授業相互参観を日常化し、感想アンケートによる授業改善を行う。 ・先進校教師招聘事業を積極的に行う。 ・教科毎の問題作成会議を常態化する。 ・教科による適切な教材開発を行う。 ・授業評価アンケートの効果的活用をはかる。	・前期後期とも実施月を指定し行った。様々な「気づき」が各自の報告書に記されており、その点では相互参観の効果は実感できる。しかしこの活動の目的が曖昧であったため、評価の基準が持ちにくい。 ・（先進校教師招聘→数学・化学で実施） ・問題作成会議は学年教科を中心に実施している。 ・教材開発は「試行錯誤」中であり、十分とは言えない。 ・授業評価アンケートは新書式に変更し、生徒自身の振り返りの機会にもなっている。前期より後期の方が高い評価になっている分野が多く、向上の方向と言える。	B	・授業研究を行う目的を明確にすること（教員個人の評価のためでなく、育成すべき生徒像に近づいたかどうか）で評価基準を具体的にし、成果を実感できるように改善する。 ・授業評価アンケートの中に来年度の授業研究重点目標の項目を入れる。
	「教師力」の向上	・教科指導以外の様々な場面で要求される教師としての力量が備わっている。	・学校経営に沿ったベクトル合わせの力は評価できる。　・生徒の自主性主体性を育成する点で力不足。	・研修会（フォーラム参加校合同研究会、定例職員会での職員研修、講師招聘事業等）への積極的参加。 ・日常の勤務における問題意識を多くの職員と共有しながら、同僚性を高め、問題解決能力を強化していく。 ・多くの教職員にプレゼンテーションの機会を設けることによって、互いの意識向上を図る。	・職員会議やその他の研修会など、研修の機会を数多く設けている。 ・学年会、教科会、教科・学年主任会などで情報交換を行っており、情報の共有化が図られている。 ・プレゼンテーションは月1～2名程度の教員が実施しており、よい刺激になっている。 ・フォーラム参加校合同研究会（2月15日実施）には6名が参加した。	A	・校外で研修したことを個人のレベルで享受するだけでなく、他の職員へ還元していく場として職員会議で時間を設けているが、さらなる機会の設定を志向する。
	進路目標を見据えた生き方の指導	・生徒が「学力＝生活力」であることを自覚している。 ・進路指導が生き方指導となっている。 ・生徒の意識が「今・自分・権利」中心から、「将来・社会・貢献」へと向上している。	・生活・学習指導が生徒1人ひとりの将来を見据えたものでなく、場当たり的な指導になっているケースが見られる。 ・家庭学習が進路目標を意識した主体的な学習になっていない。	・進路LHRなど進路指導を充実させ、入れる大学から入りたい大学へ、更に入るべき大学へといった意識の昇華を要請していく。 ・職員研修を通して進路指導の重要性を自覚すると共に進路指導力を高めていく。 ・OB講演会等を通して意識向上を図る。	・進路LHR、志望校記入、担任面接によって生徒の進路意識は向上している。また、「学びの復権」LHR、ボランティア体験等により、「社会的自己実現」の意識が涵養されている。 ・判定会議、スタディーサポート分析報告会等を実施し、教員自身が自らの進路指導力向上に努めている。 ・OB講演会の実施（平成19年4月15日）	A	・「社会的自己実現」の意識は向上している。実践力を高めていくために体験的活動を充実させる。 ・進路指導職員研修を実施し、具体的な指導例を共有することで、単なる受験指導でなく学びを昇華させていく方法を研鑽していく。

進路指導の充実	国公立大学合格者数の維持・発展	・地域を代表する進学校として相応しい実績の維持。 ・現役合格者数150名。 ・ブロック大合格者数現浪合計40名。	（現役合格） ・昨年度142名。一昨年度172名。 （ブロック大学） ・昨年度25名、一昨年度38名。	・教師の授業力向上と生徒の家庭学習時間の確保。 ・情報収集や大学訪問を通して、生徒教師とも大学研究を充実させる。 ・育友会主催の大学見学会の参加者を増やす。 ・遅進者指導を迅速に行う。 ・定期テスト、課題テストの正確な実行と事後指導の徹底をはかる。	・家庭学習時間は依然として十分とは言えない。 ・ベネッセスクールオンライン等の利用。5大学へ大学訪問を実施した（大阪大、名古屋大、名工大、金沢大、熊本大）。 ・育友会島根大学見学会を11月に実施した（保護者13名参加）。 ・各種テスト後、各教科とも指導を実施している。 ・適正な実施。	（B）	・目標とする教科学力育成を実現するため、各教科は教科経営を工夫改善する。 ・大学訪問は次年度も継続実施する。
	難関大学合格者数の維持・発展	・地域を代表する進学校として相応しい実績の維持。 ・現浪合計20名以上。 ・東京大学5名。	（難関大学） ・昨年度21名、一昨年度13名。 （東京大学） ・昨年度1名、一昨年度3名。	・教員による大学見学などを通して難関大学の魅力を生徒に伝えていく努力をする。 ・3年・専攻科合同課外等を充実させ、学力層に応じたきめ細かい指導を行う。 ・駿台ハイレベル模試の受験者を増やす。 ・教員による大学入試問題研究を充実させる。	・後期大学訪問実施（上記）。 ・夏季休業中課外、放課後課外で合同実施。 ・駿台ハイレベル模試受験者は目標人数を上回っている。 ・過去問を課外等で教材として使いながら、研究を行う。	（C）	・現役と専攻科の合同課外は現役生にとって学びの姿勢を刺激されたよい取り組みとなった。次年度も出来る限り合同実施の方向で取り組む。 ・文理コース合同集会等学年を越えた意識付けの機会を設け、意欲を喚起していく。
2．学校評価の充実	学校評価アンケートの活用	・学校評価アンケート結果を学校経営に素早く反映させ、魅力的な学校作りを行っている。 ・説明責任を認識して適切に実行している。	・生徒保護者の要望を学校経営に活かし切れていない点がある。 ・学校の考え方をうまく発信しきれていない面がある。	・ホームページを充実させ、更新を頻繁に行うことで保護者の意見や質問に的確かつ迅速に対応していく。 ・保護者から頂いた意見に対しては改めるべき点は改め、速やかに学校としての考え方を発信する。 ・学校評価アンケートの実施方法を明確に位置づける。	・ホームページの更新頻度は、年度中途までは県内高校の中でトップであったが、後期にはやや停滞した。 ・学校評価アンケートは10月下旬に実施した。	B	・組織改編を行い、より的確でスピーディーな情報発信が出来るように改める。 ・必要な情報を時機を失することなく公開し、「開かれた学校」作りに努める。
	外部評価委員会の充実	・外部評価委員による学校経営への積極的提言がなされている。 ・外部評価委員の提言が誠実かつ迅速に学校経営に活かされている。	・昨年度から他校に先駆けて導入している。 ・一定の成果はあがっている。	・今年度の重点目標を明確にし、委員による評価の基準が明確になるよう工夫する。 ・外部評価委員研修会を通して、評価委員の評価力を向上させる。	・3回の外部評価委員会を実施した（5月、10月、3月）。 ・外部評価委員研修会に参加していただいた。 ・委員会の度に適切なご意見を頂き、提言に沿ってスピードある対応をした。	A	・次年度も今年度の形を踏襲する。 ・外部評価委員会のまとめをHP上で公開する。
	苅谷研究室との連携強化	・「倉吉東高のかたち」に沿った生徒育成状況の検証がなされている。 ・「倉吉東高のかたち」に謳っている生徒育成に本校教育が機能している。	・「倉吉東度」の育成状況把握が進行中である。 ・本校における教科指導、特別活動が目指す生徒育成に機能しているか検証中。 ・研究結果がまだ学校経営に生かせる状況に至っていない。	・苅谷研究室との連携を密にして、アンケート調査の完成度を高め的確な分析を行う。 ・他校との比較を通して、本校教育のあり方を検討し是正していく。 ・効果的な行事とそうでないものとを洗い出し、改訂を行う。	・8月2日に苅谷研究室卒業生アンケート調査を大山勉強合宿にて実施。また、これまでの分析結果報告会もあわせて実施した。12月に高校3年生と大学4年生の学年のアンケート調査を行った。	B	・今回から他校の調査も始まったため、より客観的で詳細な分析が可能となる。分析結果を踏まえて育成すべき生徒が育っているかを検証し、また一層それに相応しい学校行事となるよう改革していく。
3．中高連携の強化	中学生向け特別講座の充実	・地域の中学校教員と本校教員が相互の教育内容や目的を十分理解し、それらを意識しながら一貫した指導を行っている。 ・教科学習に関して高きを目指す中学生が育っている。	・昨年度の取り組みがある程度効果を挙げたと思われる。 ・中学校への波及効果の把握が不十分である。	・昨年度と同様のスケジュールで企画する。 ・今年度は英語に加えて数学でも実施する。 ・中学への働きかけを強化し、共同で研究する方向に進める。	・昨年と同様のスケジュールで実施した。 ・中学校への働きかけも昨年以上に行ったが、中学校側の反応は期待されたほどではなかった。 ・数学と英語のセット受講を義務化したためか、受講希望者が減少した。昨年度の取り組みにより1年英語の学力が劇的に向上した。	B	・次年度も本取組の趣旨に鑑み、今年度同様英語と数学をセットにして募集する。 ・この企画の趣旨をHP等を活用して（「中学生用ページ」の作成など）、さらに積極的に広報する。
4．専攻科教育の一層の充実	地域の期待に応えられる実績の維持・向上	・生徒1人ひとりが学問に対して誠実に主体的に取り組んでおり、学力と共に人間力も向上している。 ・生徒1人ひとりの学力差に応じたきめの細かい指導により潜在能力が引き出され、難関大合格者が増加している。	・今年の専攻科入試は多くの需要があった。 ・近年順調に実績もあげている。 ・東京大学に3年連続2人の合格者を出したが、昨年度は0であった。	・テーマ研究発表、教師体験授業等の取り組み復活。 ・課外授業を現役と合同で実施することにより、より多段階の習熟度編成を行う。 ・きめ細かい個別指導。	・テーマ研究発表（「学び祭」）では、19名（指名17＋有志2）の生徒が「受験」とは距離を置いたテーマで質の高いプレゼンテーションを行った。専攻科生全員がその発表内容の広さと深さに刺激を受けていた。 ・専攻科課外は、習熟度を意識して、平日・土日・長期休業中に実施。3年との合同課外は、後期から本格的に実施した。 ・意欲ある多数の生徒の質問に対して、多くの教員が熱心に応えている。修了式における生徒代表の謝辞で県民への感謝の言葉が語られた。	A	・次年度は存廃を判断する当該年度でもあり、県民に理解される専攻科であるよう公教育としての専攻科のありようを一層鮮明にしていく。
5．定時制教育の更なる充実発展	退学者・休学者の減少	・教員があらゆる機会を捉えて生徒理解に努めている。 ・規律とけじめある基本的生活習慣が確立し、生徒達が明るく楽しく授業に参加している。	・例年になく学校生活の雰囲気は落ち着いてきている。 ・様々な事情により支援を必要とする生徒が多数在学している。 ・生徒の家庭状況がより一層多様化している。	・わかりやすい授業を実施する。 ・職員連携を充実する。 ・学校と家庭、職場、教育機関との連携を強化する。	・全職員による授業評価公開授業を実施。後期集計結果は前期に比べ一層改善し評価が高まっている。 ・定時制情報交換会を実施し、全職員の共通理解や共通認識、より一層の生徒理解に努めている。 ・各家庭状況がより一層多様化している中、幾度となく家庭・職場訪問を実施し、連携強化に努めている。 ・支援の一環として全生徒を対象とした特別補習を実施した。生徒同士のトラブルは減少傾向。学校生活の雰囲気は改善傾向。在籍者数減少の中、休学・退学者数は減少するも、休学・退学率は横ばい状態。とりわけ1年次生の数が多い。	B	・単に数字による評価結果だけではなく、多様な学習歴のある生徒の基礎学力養成とのバランスが肝要。 ・全教職員が生徒の実態、現場から深く学ぼうとする意識、姿勢を持ち、生徒との人間関係の構築に努め、継続して共通理解、共通認識に当たる。 ・職場では学校でうかがい知れない発見あり。職員集団として、多数の職員による訪問が大切。 ・普段の授業を大切にすることがまず第一。特別な支援だけではなく、指導を加えながら、自律に向けての取り組みとなるように。 ・休学・退学は学校外のやむを得ない理由によるものもあるが、生徒個々の状況を的確に把握し、職員集団として地道にかつ早い段階での対応を心がける。
6．創立100周年の準備	記念誌・式典・祝賀会の準備	・記念誌沿革史部分の原稿完成、全体の骨格大筋完成、DVD作成の準備。 ・式典・祝賀会の日時・式次第・記念講演講師決定。	・同窓会と連絡を取りながら着実に進行中。	・同窓会との連絡を密にして、滞りなく実行する。 ・新年度の職員役割分担を再確認し、タイムテーブルに沿って、着実に準備を進める。	・計画通りに進行中である。	B	・校内の実行委員会組織を編成し、遺漏の無いよう準備を進める。